

# 靴の歴史散歩

102

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

近代皮革産業と製靴業の祖といえば、佐倉の人西村勝三（1836-1907）だが、浅草の人弾直樹（1823-1889）は、身分制度の面から語られることは多いが、浅草靴産業の始祖でもあるので、業界でももっと、語られてしかるべき人という思いが強い。

「靴の歴史散歩」も連載して25年余になるが、これまでに弾製靴所を取り上げたのは、⑥⑥（2002年9月）の一回だけだからずいぶん淋しい。

桜組も弾製靴所も、同時代に活躍した企業同士だが、桜組の資料豊富に対し、弾製靴所の資料皆無に等しい差は、いったい何故なのであろうか。⑥⑥の中で、「…せめて領収書一枚、納品書一枚でもと願ひ、古書市通いに夢を託しているが、残念ながら今だにその出会いはない。」と嘆いているが、これは今も変わらない事実である。

台東区産業振興事業団の『研修センターだより』に“橋場界限”の連載があり、《陸軍御用の弾皮革・軍靴製造所》について書いたものがあるので、関連資料（平成3年10月号）として読んでいただきたい。

「徳川幕府から明治新政府に世の中が変わり、大蔵省勸業司所属になっていた橋場銭座の跡地（東京都産業労働会館）が、文明開化の新職業、皮革の製造と軍靴製造のための工場に変身するのである。

陸軍御用の弾直樹が、王子滝野川の旧幕府反射炉跡（北区滝野川・国税庁醸造試験所）に、皮革と軍靴の工場を開設したのは、明治3年（1870）9月であったが、皮革の製造に大量の水が必要なこともあり、願ひ出て隅田川のほとり橋場銭座跡に、移転して来たのは、同5年（1872）1月のことである。（『皮革産業沿革史』上巻）

移転を期に生産拡大を企り、工員450名

を募り、月産1万足の計画を立てたといわれる。しかし未熟工員による不合格品の続出、加えて外人教師の高額給与などが重なって、敢えなく工場閉鎖に追い込まれてしまう。したがって、橋場の銭座跡に工場があったのは、せいぜい明治7年までだったと考えられる。同じ時期、隅田川を挟んでちょうど真向いに、同業ライバルの桜組の皮革工場（現・墨田区向島5-8明治4年開設）があったというのも、不思議な巡り合わせである。」

掲載は弾直樹の肖像写真。『創刊三十周年記念号』（皮革時報社・昭和6年）より転写させていただいた。

